



Kumamoto Prefectural Education Center

研究テーマ

「21世紀型能力」の育成に向けた児童生徒の主体的な学習の展開



熊本県立教育センター共同研究 2015

学びと経営のイノベーション



右にある言葉は、本教育センターの研修等で使用している「感じるプレゼン」の中で示している言葉である。

先行き不透明な解のない社会を、これから先、子どもたちは生き抜いていかななくてはならない。これからの社会を生き抜く子どもたちに求められる資質・能力を育成するために、わたしたち教師は、どんな学校、どんな授業を追い求めていかなければならないのか。「新たな学校文化の創造」へ向けて、3年間の継続研究として取り組んでいる2年目の成果と課題をまとめた。

**多様な価値観・答えのない社会、
子どもたちは、どう生き抜いて行くのか。
今こそ、協働し合いながら、この多様
化・複雑化した社会を、たくましく生き
抜く力を育てていかなければならない。**

中教審 教育課程企画特別部会 論点整理を基に作成

研究テーマ

「21世紀型能力」の育成に向けた
児童生徒の主体的な学習の展開

本研究パンフレットは次の内容で構成している。

学びと経営のイノベーション

- 研究テーマ・目的・3年間のビジョン
- 研究の方法と組織、具体的内容
- 調査研究から見る資質・能力の実態

…ページ ① ~ ④ へ

学びのイノベーション

- 資質・能力を育成する学びとは
- 資質・能力と内容をつなぐ「学習活動」の工夫
- 「問い」の工夫で学習活動を生む
- 「思考過程を可視化」する工夫
- 「まとめ」と「振り返り」の工夫
- ICTの利活用により学びを支える

…ページ ⑤ ~ ⑬ へ

経営のイノベーション

「学校組織の協働体制の構築を図る学校マネジメントの在り方」

- 研究の概要
- 各モデル校の取組
- まとめ …ページ ⑰ ~ ⑳ へ

研究のまとめと次年度への提案

…ページ ㉑ ~ ㉒ へ

研究の目的

本研究では、各教科・領域等における協働・協調的な学びを手段として、「21世紀に求められる資質・能力」の育成に向けた児童生徒の主体的な学習の展開を図ることを目的としている。

そこで、右に示すようなミッションを掲げ、新たな研究推進体制のもとに、調査研究ならびに実証研究を行ってきた。

3年間の研究のビジョン

21世紀型能力の下位要素
を分析し実証研究を積む

2年次(2015)

● 1年次(2014)

21世紀型能力の理論をつかむ
協働・協調的な学びを充実する
方法を探る

3年次(2016)

次期学習指導要領改訂
に向けた実証研究による
カリキュラム開発

本年度は、3年間の研究の2年次にあたる。

1年次は、21世紀型能力に関する理論研究を軸として、「協働・協調的な学び」を手段に、実証研究を行った。

2年次にあたる本年度は、21世紀型能力の「実践力」にあたる構成要素をターゲットとして、各教科・領域において実証研究を重ねてきた。

特に、21世紀に求められる資質・能力と各教科・領域等における目標・内容をつなぐ「学習活動」における、「協働・協調的な学び」の有効性を検証した。「問い」によって学習活動が生まれるという仮説のもとに、当事者意識を生む等の「問い」の設定の工夫を図ってきた。この「問い」の工夫により、学び手は立場を変えて「批評者」にも「助言者」にもなることができ、自分事として受け止めながら教材や事象と深く関わり合い、対話を重ねていく姿が見られた。

次年度は、3年間の集大成として、汎用的能力の観点から、教科横断的に、また、小・中・高・特別支援学校の学びのつながりを系統的に捉えながら、社会に開かれた教育課程を開発していく。

研究の方法

本研究では、以下の三つの研究アプローチによって、研究を進めている。

研究アプローチ	具体的な研究内容
調査研究	21世紀に求められる資質・能力及び問題解決的な学習過程における能力、協働的な学びにおける能力等に関する意識調査及び実態調査等を実施し、授業改善につながる具体的な方策を明らかにする。
実証研究	研究協力校及び研究協力員所属校において、各教科・領域等での授業実践を通じて、授業改善の方法を評価するとともに、児童生徒の資質・能力の向上及び変容を分析する。
課題研究	学校経営や特別支援教育、情報教育の視点等から21世紀に求められる資質・能力をより効果的に高めるための方策を明らかにするとともに、学校が抱える教育課題に対応した研究を推進する。

研究の組織



学びと経営のイノベーションに向けて、本年度は、以下のミッションを掲げ、共有化を図りながら、新たな研究推進体制のもとで、研究に取り組んできた。

教育支援、情報発信・提供

学校改革の推進・強化
協働・協調的な学びの充実

研修にいかす

Mission

平成27年度研究テーマ
「21世紀型能力」の育成に向けた
児童生徒の主体的な学習の展開

新たな研究推進体制

経営研究班

授業研究班

情報教育研究班



経営型研究協力校

県内全域から公募による5校に委嘱し、経営の視点からアプローチ



教科型研究協力校

山鹿小・山鹿中・鹿本高・荒尾支援学校に委嘱し授業改革からアプローチ



県内全域公募による研究協力員

「研究がしたい」「もっと学びたい」と探究する先生方を県内から公募し研究を協力して行う。

各教科・領域等における研究の具体的な内容

各教科・領域等において以下の研究テーマ（具体的内容）を設定して、研究を進めている。

研究班	研究テーマ（具体的内容）		各教科・領域等
授業研究班	21世紀に求められる資質・能力の要素（主に実践力）をターゲットにした実証研究	実践力	関係形成 外国語科 外国語活動、外国語科 体育科・保健体育科 算数科・数学科 道徳、特別活動
		実践力	自律的活動 理科、生活科 音楽科、美術科 技術・家庭科(技術分野)
		実践力	持続可能な社会づくり 社会科、地歴・公民科 高等学校家庭科 総合的な学習の時間 産業教育
	「インクルーシブ教育システムを踏まえ、障がいの状態に応じた主体的な学習の展開をめざして」 ～「つながる」を意識した多様な場での「合理的配慮」を通して～		特別支援教育研修室
情報教育研究班	「児童生徒の主体的な学習を展開するためのICT活用に向けて」		情報工学堂 情報教育研修室
経営研究班	「学校組織の協働体制の構築を図る学校マネジメントの在り方」		経営研修室 教育相談室 ※学校経営コンサルティング事業

21世紀に求められる資質・能力に関する児童生徒の意識調査結果

国立教育政策研究所が整理した資質・能力の構造化のイメージ

求められる力	具体像（イメージ）
未来を創る（実践力）	生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者と関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、健やかで豊かな未来を創る力
深く考える（思考力）	一人一人が自分の考えを持って他者と対話し、考えを比較吟味して統合し、よりよい答えや知識を創り出す力、さらに次の問いを見つけ、学び続ける力
道具や身体を使う（基礎力）	言語や数量、情報などの記号や自らの身体を用いて、世界を理解し、表現する力

21世紀に求められる資質・能力

未来を創る(実践力)

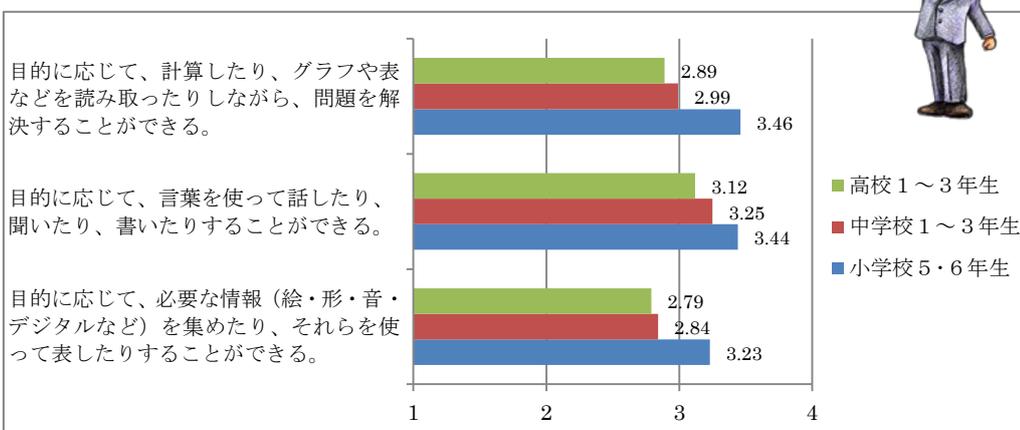
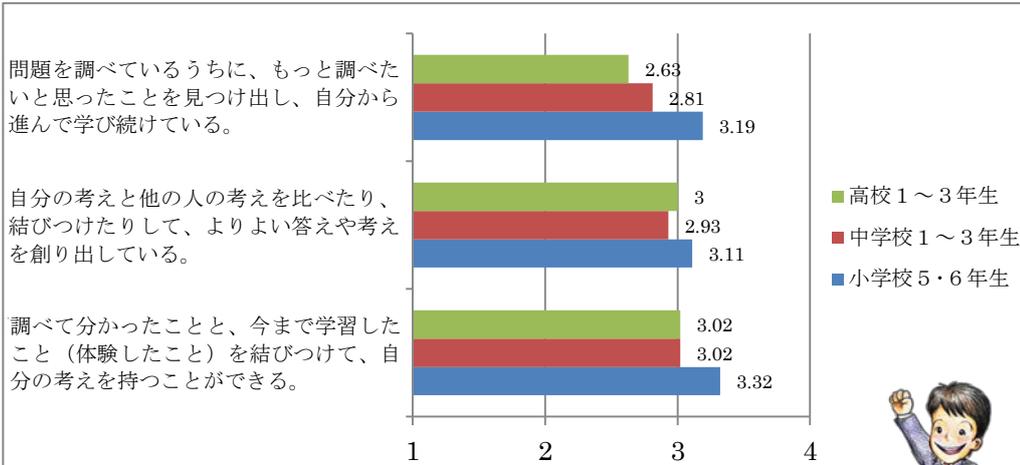
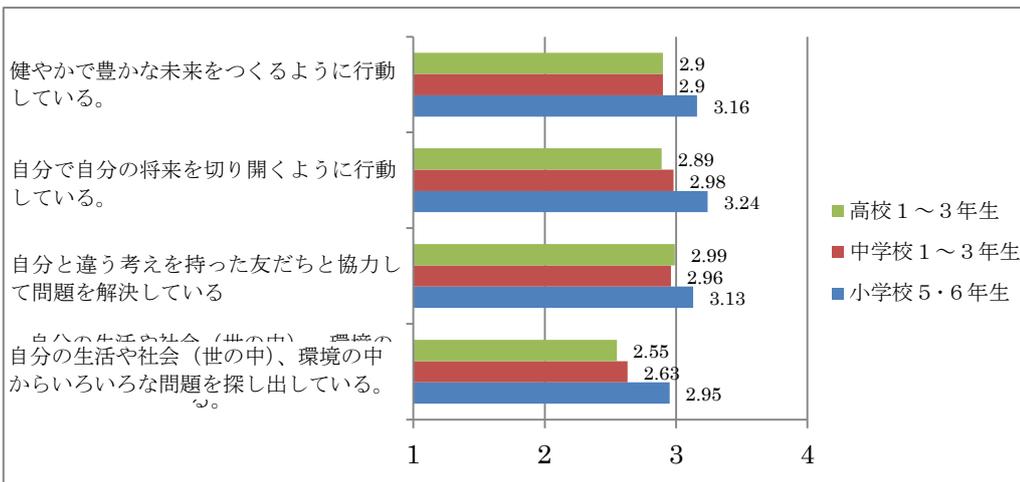
- ・自律的活動
- ・関係形成
- ・持続可能な社会づくり

深く考える(思考力)

- ・問題解決・発見
- ・論理的・批判的思考
- ・創造的思考
- ・メンタリング
- ・学び方の学び

道具や身体を使う(基礎力)

- ・言語
- ・数量
- ・情報



全体的な傾向として、小学5・6年生は意識が高く、中学校・高等学校と学年が上がるにつれて意識が低くなっている結果となった。このことは、中学校・高等学校段階において、自分の姿をより客観的に捉えることができるようになる発達段階を考えると、それに応じて段階的に自らの学びを振り返る「自律的活動」の必要性を証明しているともいえる。

また、各要素を比べてみると、全体的に低い傾向にあるのが思考力である。問題解決的な学習を展開することによって、更に、思考力を中核とした授業の展開の工夫が必要である。

問題解決的な学習過程の場面に見られる能力に対する意識の実態



問題解決的な学習の過程に照らし合わせた能力の実態

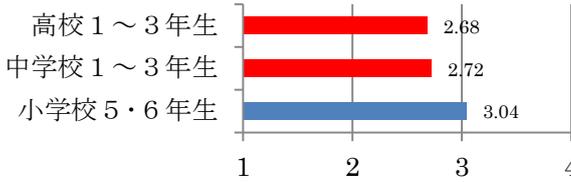
つかむ

見通す

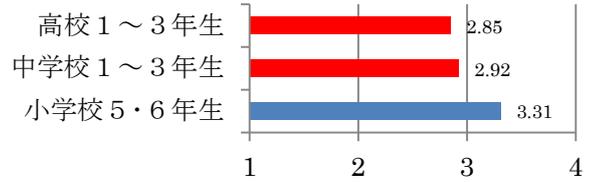
さぐる・深める

まとめる

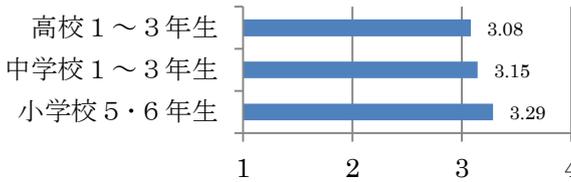
疑問に思ったことや不思議に思ったことなどから、自分で問題（問い）を立てて調べることができる。



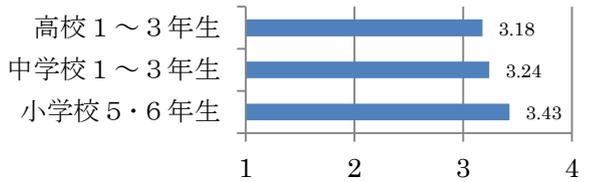
授業の目標や課題について、自分なりに考えたり、予想したりしている。



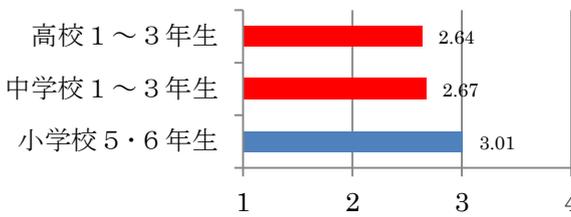
疑問に思ったことや分からないことは、いろいろな方法（本やインターネットなど）で調べることができる。



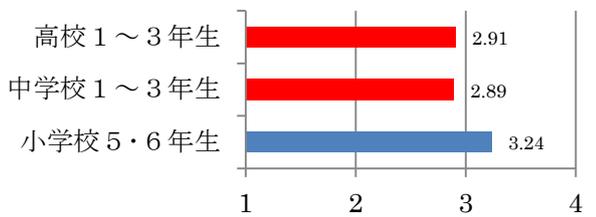
問題や課題について、ペアやグループの友だちと協力して解決することができる。



調べて分かったことなどをまとめて、相手に分かりやすく発表することができる。



話し合いの時間で、友だちの考えを聞いて、それに対して、教えたり、アドバイスをしたりしている。



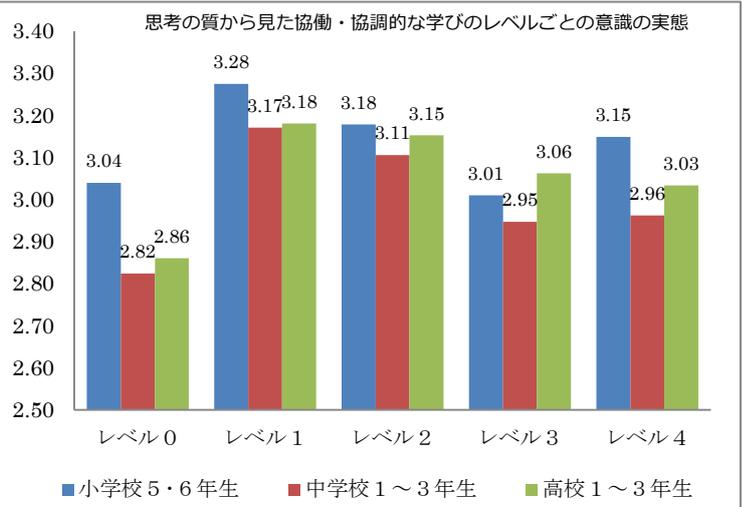
問題解決的な学習（課題解決学習）過程の各場面における児童生徒の能力に対する意識の実態は、上記の結果となった。各項目を比べて見ると、問題発見力や論理的思考力が他の項目よりも低く、まとめる力（分類・整理）といった思考力に課題があることが分かる。特に、協働・協調的な学びの場面における「分かりやすく伝える」ことや「友だちとの教え合いや学び合い」に対する意識が、他の項目よりも低いことが分かった。相手意識や目的意識を明確に持ち、多様な価値観を持った他者と協働して学び合う活動を意図的・計画的に組み込む必要がある。

協働・協調的な学びにおける思考の質から見た児童生徒の実態

昨年度の研究で提案した思考の質から見た協働・協調的な学び（いわゆる「学び合い」）をレベル化すると、自己の考えの深まりを見ることができる。そこで、レベル別に期待する生徒の姿を示し、その意識の実態を把握した。

思考の質から見た協働・協調的な学びのレベル

活動	思考の質	期待される姿
協働・協調的な学び	レベル0	出し合う（正誤入り交じり）
	レベル1	伝え合う（誤→正）
	レベル2	伝え合う（正→複数の解法・考え）
	レベル3	伝え合う（自分の考え→再構築）
	レベル4	伝え合う（新たな価値を付加された考え）



レベル0は、学び合う姿と言うよりも、一方通行的に自分の考えを相手に伝える意味合いが強いため、あまり学習活動として行われていないことが分かる。よって、共同解決の場面でよく見られてきた、教え合いによる正誤の判断や複数の考えに触れるといったレベルの学習活動に対しては、高い意識で捉えていることが分かった。反面、自分の考えを友達の考えをもとに、再構築することに対しては、意識が低いことが分かった。これは、協働的な学びにおける練り上げ方がうまくいかないという授業者の悩みともつながっていると考えられる。

これらの結果からも分かるように、協働・協調的な学びを充実するためには、学びのレベルを明確にしたねらいを持って協働的に学び合わせる事が重要であり、児童生徒とそのねらいを共有することが必要である。

学びのイノベーション

教科型研究協力校&研究協力員との授業研究



本年度の授業研究のポイント

ポイント①

求められる資質・能力を育成する「学習活動」

ポイント②

「問い」で学習活動を生む

ポイント③

「思考過程を可視化」して学びと評価の一体化

ポイント④

自らの学びに気付く「振り返り」

本研究テーマで取り組んだ今年度の研究の主張点は、熊本型授業の質を高めたことと、アクティブ・ラーニングによる深い学びを求めたことである。学びのイノベーションによる「授業観の転換」で、子どもたちが主体的に学びとる授業を展開してきた。

特に、研究2年目ということで、全教科・領域及び全校種において、21世紀に求められる資質・能力として示された「実践力」の各要素を育成する学習活動を工夫し、検証を図ってきた。

児童・生徒の学びを「引き出し」、児童・生徒が自らの学びを「振り返り」、その学びを「支える」効果的なICTの活用と学びのUD化について、より多くの実践から研究提案する。

本パンフレットでは、右に示したポイントについての概要と各教科・領域等の見所を載せている。

詳しくは、県立教育センターホームページをご覧ください。

21世紀に求められる資質・能力を育成する協働・協調的な学びとは？

個の学び

自律的活動

期待される姿①

「この課題に自分はどう向き合うのか。」
「自分は、どんな答え（仮説）を持つのか。」（学習経験・生活経験）

期待される姿③

「自分が予想した考え方は〇〇だから、□□から調べてみよう。」（焦点化）
「自分の考えとする根拠は…」

問題解決的な学習
課題解決学習
探究型学習など

これらの学習過程
（学びのプロセス）
によって、思考力を
中核として学習が
展開される。

単元モデル・一単位時間モデル（例）



期待される姿②

「わたしは〇〇と予想したけど、みんなは違う視点から考えているのね。」
「みんな同じ予想（考え）ばかりだったけど、違う視点からも考えてみようか。」

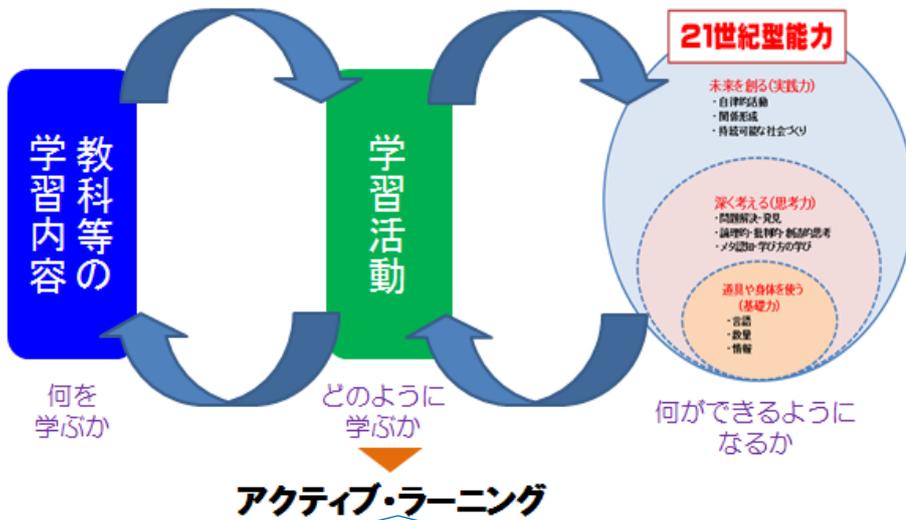
協働する学び

関係形成



育てたい資質・能力と教科の内容をつなぐ、学習活動を仕組む！

育てたい資質・能力と内容をつなぐ、学習活動への注目



本研究では、平成27年3月に国立教育政策研究所から示された「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」を参考にして、左図に示されたような捉えで、学習活動を組み、授業の構成を図った。

特に、研究の手段とした「協働・協調的な学び」を学習活動に位置付け、「問い」による工夫で、深い学びを提案してきた。

本研究で言う、「アクティブ・ラーニング」とは『「問い」の工夫により、子どもの思考が常にアクティブになる学習活動の展開』と捉え、下に示したモデル図のように「個」と「協働」による学びが重要であると考えます。

期待される姿⑤

「学習課題（問題）に対する答えは、〇〇である。」
「〇〇については、□□だということが分かった。」

期待される姿⑦

「最初の自分は〇〇と考えていたけど、□□さんの△△という考えで〇〇のように変わった。」
「個の学習で、□□ができるようになった。」
「今日学んだことを、次は〇〇に生かしたい。」

深める
・追究・検証

まとめる・広げる
解決・まとめ・発展

振り返る

論理的思考力・批判的思考力

問題適応力

メタ認知的思考

期待される姿④

「わたしは〇〇と考えました。理由は、□□の資料から△△だからです。」
「〇〇さんの考えは、確かに□□ですが、わたしは少し違って、△△と考えました。」
「〇〇さんと同じ考えですが、理由が違います。」
「きっと〇〇さんの考えは、△△だと思います。」

期待される姿⑥

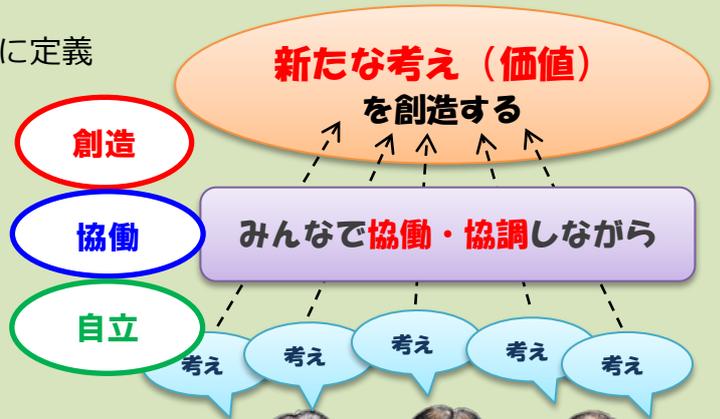
「みんなで〇〇と考えてきたけど、もっと違う視点から考えてみよう。」
「〇〇や□□という考えを聞いて、それぞれを活かした△△という考えもいいんじゃないかな。」

本研究で提案する「学習活動」は、「協働・協調的な学び」!

本研究でいう「協働・協調的な学び」を次のように定義している。



多様な学習者が、お互いの個性を認め合い、違いを乗り越えて学び合いながら、それぞれが知識（考え・新しい価値）を獲得、創造する学習



豊かなかかわり合いのある言語活動の設定により『対話』を生む



認め合い 支え合い 高め合い

自分自身との対話が始まる



見通すのは
◆答えや結果の見通し
◆考え方・方法の見通し



教材や事象との対話が始まる

他者との対話が始まる



自分自身との対話で終わる



一単位時間における「学びのプロセス」

課題把握

見通し

自力解決

協働解決

まとめ
振り返り

自律的活動を生む『個』の学び

多様な価値観（考え）を持った他者と協働するには、常に自分に問かける「自律的活動」が重要となる。よって、まずは自分自身と対話するような「問い」が必要であり、自力解決の時間を確保する必要がある。



協働的な学びで関係形成を図る

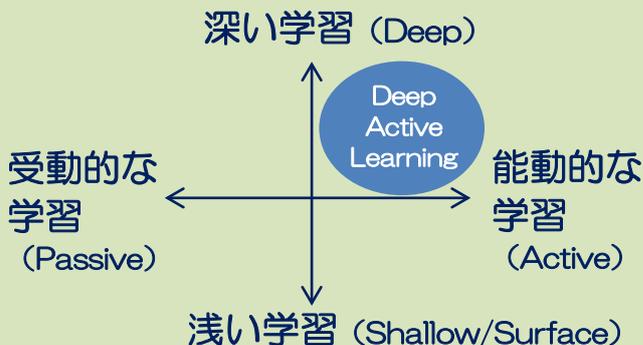
価値観の違う他者と協働するには、折り合いをつけていく必要がある。対立する考えと合意形成を図ったり、修正を図ったりして、比較吟味する活動を協働しながら行うことで、関係形成を図っていくことになる。また、日頃から信頼関係・人間関係を築き、支持的風土のある学級づくりも必要となってくる。

学びの文脈を創る

昨年度から、本教育センターでは「協働・協調的な学び」を提案している。昨年度の研究は、この学びが充実するための構成要素を「引き出す」「振り返る」「支える」の視点から考え、授業改革のポイントとして示した。今年度は、求められる資質・能力を育成するための具体的方策として、検証授業から見てきた手立てを明らかにする。

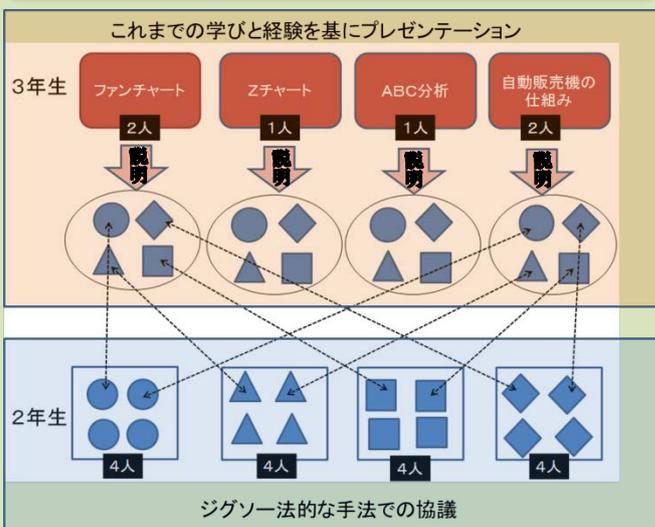


「活動中心」型授業を 超える深い学びへ



参考文献：松下佳代氏「ディープ・アクティブ・ラーニング」2015より

相手意識・目的意識を高め、 多面的に知識を構成する活動



図の実践例は、上級生が下級生に対してプレゼンテーションを行うという、異学年での交流を組み込んだ学習活動の例である。

上級生はこれまでの学びと経験をもとに、下級生に対して明確な目的を持ってプレゼンを行う。また、下級生は、ジグソー法的な手法でそれぞれの視点から学び合い、関連付け合いながら知識を構成していくことになる。

下級生が協働的に学び合う場面において、上級生は、交流を通じた学びが下級生に生かされているか、自ら評価するようにした。そのことで、相手意識の高まりの中で、深い学びが展開されるように工夫を図った。

国語科 (小)

言葉に着目しながら読む力を高め、協働・協調的な学びを通して関係形成を育む授業の展開についての研究提案

本研究では、課題解決的な学習過程にするために、課題意識を持つ場面において「言葉への着目・焦点化」を、課題意識を継続して取り組むために「単元を貫く言語活動の設定」を行うこととした。これらの取組によって、豊かなかかわり合いのある言語活動が学習の中で行われることを目指し、児童の「学びを引き出す」こととした。



国語科 (中・高)

読む能力を育成するとともに、協働・協調的な学びを通して他者との関係形成の充実を図る授業の展開についての研究提案

本研究において、「考えを一つにまとめる」や「感想を交流する」「編集者になってふさわしい小見出しを決める」という言語活動を行った。これらに共通するのは、グループや全体における「協働・協調的な学び」の姿である。生徒の協働・協調的な学習を通して国語科における読む能力を育成する授業は、「関係形成」を育むことにもつながることが明らかになった。



外国語活動 (小)・外国語科[英語] (中・高)

コミュニケーションへの積極的な態度、英語を使うことを重視した授業の展開についての研究提案

今回の研究により、協働・協調的な学びを通して、児童生徒の相手意識が向上し、コミュニケーション能力の向上や関係形成につながることを示すことができた。学習活動を「価値あるコミュニケーションの場」とするために、相手意識の向上や問いの設定の工夫、自己表現の重要性など、授業改善に必要な視点を明らかにすることができた。



資質・能力を育むことを意識した「問い」の設定により学習活動を生む！

「問い」とめあてと
学習課題と問題と
何がどう違うの？

本研究では、「問い」と本気で向き合うために、次のように整理している。

- ◇ めあて＝目標 ※小・中学校段階では、めあてと表記し、高校では目標
- ◇ 「問い」＝学習課題、学習問題、問題、発問等
※「問い」には、これらすべてを含んでいる。学校によっては、めあてに「問い」（なぜ～など）の表記があるところもある。各学校での共通理解が重要になる。

子どもの**学び**を引き出し
より**主体的な学習の展開**を = 「問い」 × 学習意欲
図るには・・・？

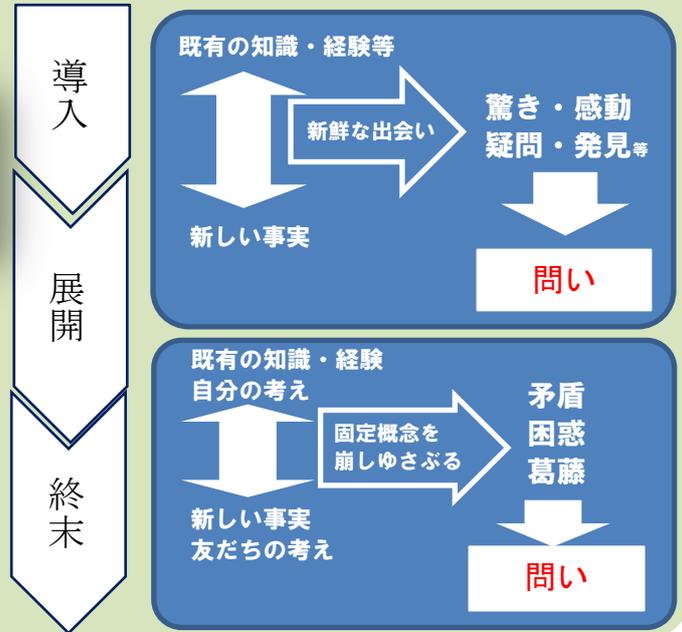
「問い」
の工夫

工夫① 探究心をくすぐる「問い」

【例】高校家庭
和食の基盤である「だし」の伝統を守るにはどうしたらよいだろうか？
※伝統文化の継承者としての立場で「自分事」として受け止め、次々と探究していく姿が見られた。



★知的好奇心をくすぐる手立てとは



工夫② 当事者意識を生む「問い」



【例】高校地理
京都議定書は成功だったと言えるのか？
温室効果ガス削減目標を日本政府にアドバイスしよう。
※評価者の立場や助言者の立場になって考えることで当事者意識が高まる姿が見られた。

社会科（小・中）、地歴・公民科（高）

当事者意識を生む問い、多様な価値観を持つ他者と協働する学びの展開についての研究提案

本研究では「21世紀型能力における「社会参画力」と「持続可能な未来への責任」を育む社会科、地歴・公民科学習の展開」という主題を設定し、「多様な価値観をもつ他者との対話」を学習活動の主軸に据えた。また、対話の内容を教科の本質に適った価値あるものとするため、単元および各時間の学習課題として「当事者意識を生む問い」を設定した。



家庭科（高）

和食の伝統「だし」を守るために何ができるか、ポスターセッションを通して考える授業の展開についての研究提案

家庭科の特質は、学んだことを生活に生かしてこそその教科であり、実践力の育成が最重要課題である。しかし、知識として理解したことを実践に結びつけていくこと、さらにこれを継続させることは難しいと感じている。実践力を高めていくには、「実践したい、すべき」という「意識・思考」を持ち、そしてこの「意識・思考の継続」が実践に結び付くのではないかと考える。





本研究では、求められる資質・能力と教科の目標・内容をつなぐ学習活動を生み出すために「問い」の工夫を図ることを研究の柱とした。1年次の研究成果と課題として、求められる資質・能力を育むためには、「問い」の在り方が必要不可欠であることを研究提案してきた。今年度は実証研究として位置付け、検証を重ねながら、「問い」と向き合い、類型化を図ってきた。

例です

21世紀型能力

未来を創る(実践力)
 ・自律的活動
 ・関係形成
 ・持続可能な社会づくり

深く考える(思考力)
 ・問題解決・発見
 ・論理的・批判的・創造的思考
 ・メタ認知・学び方の学び

道具や身体を使う(基礎力)
 ・言語
 ・数量
 ・情報

実践力

**Which?
How?**

思考力

**Why?
How?**

基礎力

**When?
Where?
Who?
How?**

未来志向型の「問い」これからのためには？
 価値判断に迫る「問い」どちらが～？
 意志決定させる「問い」あなたはどのように？
 提案型の「問い」～しよう？してみよう？

問題追究型の「問い」なぜ～なのだろうか？
 課題解決型の「問い」どうしたらいいの？
 プロセス型の「問い」どのように～？

※身体（五感）や情報、言葉を使って追究する
 知識習得型の「問い」いつ、だれが、どこで
 理由根拠型の「問い」あなたは、なぜ？
 ミッション型の「問い」どうやって？

工夫③

教材に深く入り込む「問い」



【例】高校国語
 「筆者が付けた小見出しはふさわしいだろうか？」
 「自分たちだったら、どんな小見出しをつけるだろうか？」

※言語活動を充実するために「比較・吟味」する活動を設定し、筆者の小見出しの評価・自分たちの小見出しの考え、他のグループの小見出しの評価と、立場を変えて深く吟味する姿が見られた。

工夫④

相手意識・目的意識のある「問い」 （活用型ミッション課題）

【例】高校理科

来月開催される「リサイクル業者向け説明会」の主催者から、「裁断されたプラスチック片がどれなのか、判別する方法を教えてください」との要請がありました。その要請に応えるため、私たちは判別方法を具体的に計画し、その主催者に説明しなければなりません。しかし、手元にいくつかのデータがある位で、使用できる薬品・器具も限られています。
 ※リアルな文脈のある課題の提示により、相手意識・目的意識を持って意欲的に追究活動へ取り組む姿が見られた。

算数科・数学科（中・高）

算数・数学の教科の内容及び特性を生かした学びを通して、関係形成を育む授業の展開についての研究提案

本時のねらいに迫るための言語活動を行うためには、「発問」やねらいに迫る言語活動になっているのを見取る工夫が必要になってくる。そこで、「学び合いのレベル（班やペアでの活動の目的を段階的に示したもの）」を明確にしたペアや班での活動を設定した。結果、相手に伝わるように説明する、相手が何を伝えたいのか考えながら聞いたりするなど、「関係形成」に関わる意識の向上が見られた。



理科（小・中）・物理（高）・化学（高）

課題解決に向けて計画・修正し、当事者意識が持てる自律的活動力の育成を目指す理科授業の展開についての研究提案

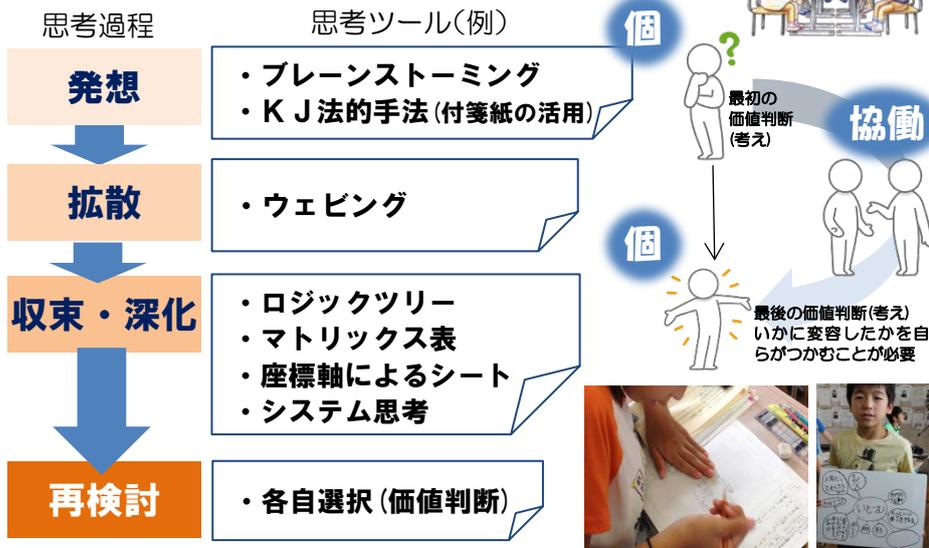


生徒の感想の「うまくいかないことや思った通りにならなかったけど、その時に「どうするか？」「どう対応するか？」が大事だと思った。」という記述にあるように、自らに修正・改善を迫る学習活動が、子どもの学びを深くする。活用型ミッション課題により、計画の修正や改善を迫る場面で学習過程に取り入れることで、子どもたちの自律的活動を引き出し、深い学びへとつなげることができた。

思考ツールを活用して協働的な学びの中で練り上げる！

協働して学び合うからこそ、必要なもの！
自らの学びを見える化する思考ツール

よく思考の「広がり・深まり」と言われるが・・・



多くの学校で実践されている「学び合い」の中で課題としてあがるのが、「練り上げ」である。様々な思考ツールにより、思考過程を可視化することで、練り上げが充実していく。

実践例：高校地歴「地球環境問題」
「問い」『地球温暖化対策として日本が果たす役割とは？』

※習得した知識をもとに、「問い」に対する自らの考えを付箋紙に書き2軸の視点から判断してアイデアシート上で考えを共有しながら、協働・協調的に学習を進めていった。

ワークシートの工夫による思考過程の可視化

- 図表の活用 考えたことをスケッチで表す【美術科参照】
- 論理展開が見えるシート 主張と根拠【理科参照】
- 思考ツール(ウェビング図、ベン図)【国語科参照】
- 思考の流れに沿ったシート【技術分野参照】
- 個→協働→個の思考に沿ったシート【高校地歴科参照】

「どのように考えるのか」道筋が分からない子へ

● どう考えていいか「分からない」子の思考には・・・
「何が分からないのか！」さえ分かっていないのが現状である。まずは、子どもに寄り添い「つまずきの分析」を行うことが重要になる。これらを繰り返すことで、道筋が分からなかった子も課題解決の思考過程が繋がっていく。



音楽科(小)

協働しながら創造する学び(音楽づくり)を通して、自律的活動力を育む授業の展開についての研究提案

本年度の研究では、音楽づくりにおける検証授業を行い、自律的活動力の高まりを見ることができた。同時に、「関係形成」は、音楽科のどの活動をする上でも必要になってくることが分かった。「自分」がどのような思いや意図を持ち、音や音楽と向き合ったか、どのように価値判断を行ったか、といった自律的活動力を育むことは、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育てることにつながっていくと考える。



美術科(中)

主体的・協働的に課題の解決を図る美術科の授業の在り方についての研究提案



「自律的活動力」の育成を目指し、対話を通して他者の考え方を吟味し取り込み、自分の考え方の適用範囲を広げる学習活動を試みた。また、題材の構成や1単位時間の学習プロセスを工夫し、主体的な学びを引き出す研究を行った。他者と協働し、試行錯誤しながら主体的に課題の解決を図る学習プロセスを身に付けさせたことにより、生徒が学びの大切さに気付き、普段の生活や社会、そして将来の生活にも役立つという意識の変容につながった。



本研究における取組の視点から、ここでは「思考過程の可視化」についてまとめている。課題解決を図っていく上での学びのプロセスを可視化することや、学び合うときの思考を可視化することは協働・協調的な学びにおいては大変重要である。子どもたちの学びの見取り（評価）においても、必要となってくる。

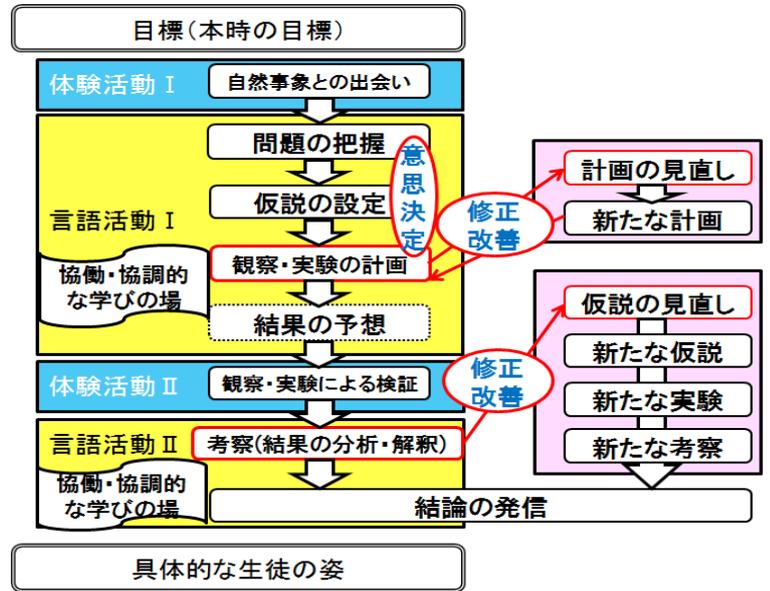
学びのプロセスを可視化する（例）

問題解決的な学習の過程（学びのプロセス）において思考過程を可視化して意図的・計画的に単元の指導計画に位置付けることが重要である。右図は、本研究における理科での実践例である。

個として自分の考えを明確に持ち、多様な考えを持った他者と協議しながら考えを交流する中で、自分の考えを修正していく場を設定している。

このように、問題解決的な学習の過程の中で、自分の考えに基づいて作成した計画を振り返り、修正・改善を行う場を設定し、提示することで、児童生徒が自らの学びのプロセスを身に付けていくことができた。

（理科（小・中・高校）参照）



昨年度の研究でも提案した協働・協調的な学び（いわゆる「学び合い」）の体系化から

思考の質から見た協働・協調的な学びのレベル

活動	思考の質	期待される姿
協働・協調的な学び	レベル0	出し合う（正誤入り交じり）
	レベル1	伝え合う（誤→正）
	レベル2	伝え合う（正→複数の解法・考え）
	レベル3	伝え合う（自分の考え→再構築）
	レベル4	伝え合う（新たな価値を付加された考え）

※順序性はなく、活動のねらいに沿って設定する

多様な価値観を持った他者と協働して学び合う場では、活動の意図（ねらい）を明確に持つておく必要がある。学び合った先のゴールを思い描き、目的意識を持って活動に臨むと、どのように考えていけばいいのかわ、その「思考過程」や「振り返り」が焦点化されていく。

このように協働的な学びの中で思考過程が可視化されると、教師による評価もより明確となっていく。ただし、順序性があるものではなく、ステップアップしていくものではないため、あくまで活動のねらいに応じて授業者が設定し、児童生徒と共有することが必要である。

生活科（小）

問い、振り返り、言葉かけ、学習シート等の工夫により、自律的活動を育む生活科の授業の展開についての研究提案

本年度の研究において、自立への基礎につながる自律的活動の高まりを見ることができた。そこには、問いの工夫により児童から問いを引き出し、気付きを深める関わりがあった。また、伝え合いや振り返りを毎時間位置づけ、教師や家族、友だちが共感的に関わっている姿があった。そして、改めて、生活科で大切なことは、共感的な児童理解による言葉かけであることが分かった。



技術・家庭科（技術分野）（中）

イノベーション体験を取り入れた学習活動で、自律的活動を形成するための研究提案

多様な他者との関係は、価値の学習と密接に関係している。技術分野の学習活動では、ペーパープロトタイピングによるイノベーション体験を取り入れた学習活動により、自律的活動の価値であるレジリエンス（しなやかな自己回復力）に大きな変化が認められた。生徒は、学習活動に課題を与えることで軽いストレスを感じる。その課題を解決するに従って他者の意見を受容し、解決に向けて行動する状態が形成されていることが分かった。



自らの学びを振り返る「まとめ」と「振り返り」の工夫

いま、協働・協調的な学びで最も重要視されているのが「振り返り」です！



「まとめ」と「振り返り」の違いがよく分かりません。何を振り返ったらいいのかわかるのか？

多くの学校の校内研修で話題となっているのが、何をどのように振り返らせればよいのか？ということである。「まとめ」と「振り返り」の違いを明らかにし、振り返りの仕方を身に付けさせよう。

学習者自身が「振り返る」ことで、学びと評価が一体となり、より主体的な学びが充実する。

これからの社会に求められる資質・能力を育む協働・協調的な学びの展開を通して、振り返りが「問い」とともに、最重要視しなければならない学習活動であることが分かった。いかに子どもたち自身が自らの学びを見つめられるかがポイントである。

まとめ

まとめは、**学習内容**に気付かせるものである。主体的に取り組ませる必要がある。

振り返り

振り返りは、**学習の方法**に気付かせるものである。また、**自己の変容**に気付かせるものでもある。

「何が分かったのか」「何ができるようになったのか」「どのように分かったのか」「この学びでどう変わったのか」



場面	効果	ねらい	ツール
導入	学びの定着 学びの焦点化 学びの共有	既習事項の振り返り 現在の自分への気付き 課題や見通しの共有	自己評価 プレテスト 他者への説明
展開	学びの修正・改善 学びの自覚 学びの共有	整合性の検証 妥当性の検証 修正・改善	ワークシート 相互評価 他者への説明
終末	学びの自覚 学びの共有 学びの修正・改善 「問い」の連続性	学習内容のまとめ 学習方法のまとめ 感情の変化 自らの変容への気付き 他者とのかかわり これからのこと	ワークシート チェックカード 自己評価 他者への説明

※ 何を振り返るのかを明確にして、ねらう「振り返り」を子どもから引き出す「問い方」が重要である。

道徳（小・中）

多様な指導方法でねらいとする価値に迫りながら、関係形成を育む授業の展開についての研究提案

人としての生き方や社会の在り方について、時に対立がある場合を含めて、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を身に付けることがますます重要であり、道徳教育が、大きな役割を果たす必要がある。そこで、道徳の時間における問題解決的な学習の展開による「関係形成」の育成に取り組んだ。



特別活動（中）

学級の成長を目指す話し合い活動を通して、関係形成を育む学級活動の授業の展開についての研究提案

合唱の練習がまとまらなかったとき、本気で意見をぶつけ合って話し合ったから、その後まとまることができたという意見が多く出された。相手に深く入り込んでいく本気の話し合いが行われたのだと考える。本音を引き出し、みんなが意欲的に参加する話し合いにするためには、支持的風土、話し合いのスキル、合意形成の手立ては不可欠である。そこから、更なる学級の長につながっていくことが期待される。



本研究では、21世紀に求められる資質・能力の各要素をターゲットにして、協働・協調的な学びでその育成が図られるのかを検証してきたが、その過程で、いかに「振り返り」が重要であるかを再確認することができた。

「めあて」「学習課題」と「まとめ」「振り返り」！

学習過程	時間	学習活動
導入	5	○本時のめあてを確認する めあて
展開	30	学習課題（問題）
終末	10	○学習のまとめをする ○本時を振り返る

※ 多くの授業で、上の図のように、「めあて」と「学習課題（問題）」が提示されます。それに合わせて、「まとめ」と「振り返り」も終末に行われることが多くある。授業者自身がこれらの違いを明確に持っておいた方がよりよい。協働・協調的な学びを充実させ、求められる資質・能力を育成するためにも、校内研修等で共通実践を図って欲しい。



この指導案の展開に見る「振り返り」は、ごく一般的な例を挙げただけである。本研究で取り組まれた、算数科・数学科、体育科・保健体育、技術家庭科（技術分野）の実践は、定着（スキルアップ）を図る際の振り返りを提案している。ぜひ、ご参照を。

ここまで紹介してきた各教科・領域等における研究の詳細については、県立教育センターのホームページで公開しています。ぜひご覧ください。

熊本県立教育センター 検索



体育科・保健体育科（小・中・高）

運動の特性に触れながら、運動に親しむ資質・能力、そして関係形成を育む授業の展開についての研究提案

検証後の自由記述によると、「協力」「思いやり」「他者理解」等の「関係形成」に関連のある内容をほとんどの児童生徒が記述していた。「どのような資質・能力を育みたいのか」という授業者のねらいや意図が表れており、学習活動が強く影響した結果である。教科の内容と同様、汎用的資質・能力についても、授業者が「何を育むのか」を明確にして学習活動を組むことが大切である。



産業教育（高）

これからの社会に求められる資質・能力を明確化し、実践力を育成する研究提案

○ルーブリックを提示することで、生徒自身が身に付けるべき資質・能力を明確にして学習活動に取り組むことができたこと。○実社会や生活と関連付けた課題を設定することで生徒の意欲の喚起を図れたこと。○異学年との交流など、相手意識、目的意識の高まりにより、生徒の主体的な学びを引き出せたこと。これらが、21世紀に求められる資質・能力の育成につながった3つの要因である。



総合的な学習の時間（小・高）

探究的な学習のプロセスをスパイラルアップさせ、主体的・協働的に学ぶ学習（アクティブ・ラーニング）に関する授業の展開についての研究提案

今年度は、「持続可能な社会づくり」に重点を置き、研究に取り組んだ。その結果、地域における住民、市民としての「立場を与える」ことにつながった。それは、総合的な学習の時間において、地域を題材とする中で見出される様々な問題に児童生徒が対峙し、「自分に何ができるか」という自分事として課題を捉えたことで、郷土への思いや責任が高まった。



特別支援教育（小・中・特）

インクルーシブ教育システムを踏まえ、「つながる」をキーワードに協働できる子どもをめざした取組

障がいのある児童生徒の「主体的な学習の展開」を図るためには、その障がいの状態に応じた「合理的配慮」と「多様な学びの場」が大切である。本研究では、「つながる」を意識した多様な学びの場を設定し、個々の障がいの状態に応じた「合理的配慮」を提供することで、児童生徒がそれぞれの持てる力





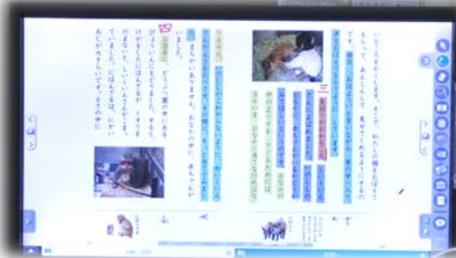
教師の活用

授業のツールとして、先生が使う！！
ICTの機能：視覚化、焦点化、共有化

ICT（電子黒板やプロジェクタ、実物投影機、タブレット PC 等）を活用して、より分かりやすい授業ができる。これは、学びのUD化を支える重要な視点である。このようなICTの特長を最大限に生かし、「一斉指導による学び（一斉学習）」に加え、「子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び（個別学習）」や「子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び（協働学習）」などの多様な学びを進めることができる。

単にICTを活用して提示するのではなく、「教材としての価値があるかどうか」を考えながら提示する教材等を精選することが重要である。

興味・関心を
 高める

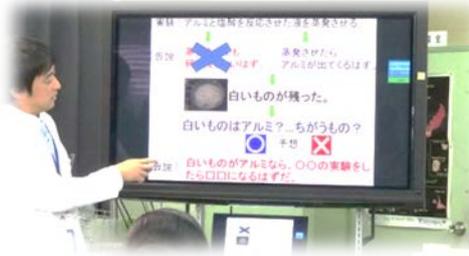


教科書と同じ画像の提示

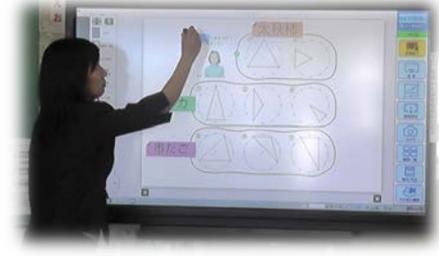


電子黒板を利用した学習ゲーム

課題把握を
 明確にする



前時の学習を整理して提示



比較することによる新たな気づき

思考や理解を
 深める



考えを全体で共有

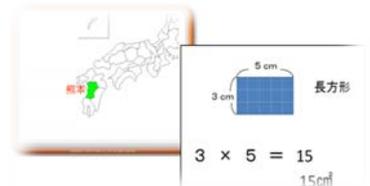


実際に見せられないものを見せる

知識の定着を
 図る

フラッシュ型教材

- | | | |
|------------|---|-------------|
| ① テンポ良く。 | → | ・ 顔があがる。 |
| ② 短い時間で。 | | ・ 緊張感が生まれる。 |
| ③ 繰り返し使う。 | | ・ 集中する。 |
| ④ たくさんほめる。 | | ・ 自信がつく。 |



短い時間でテンポよく繰り返すことで、知識の定着を図る

子どもの活用

学習活動のツールとして、 子どもたちが使う！！

電子黒板やプロジェクタ、実物投影機を活用して考えの共有化を図ったり、タブレットPCを活用して、自分と友だちの考えを比較・検討したりすることができる。

ICTの特長を生かした授業設計を行い、効果的にICTを活用することは、児童の主体的な学びにつながる。事前にどのような使い方をさせるのか、授業設計をする上で入念に検討する必要がある。

検討のポイントとしては、例として次のような点があげられる。

- ・タブレットPCを活用する場合、グループに1台か一人に1台か。
- ・どのような学習過程で子どもたちが使うのか。
- ・子どもたちはどんなコンテンツを使うのか。 など

情報を収集・選択する



実験の様子を撮影・記録



友達の実技を撮影・観察

考えをまとめる



タブレットPC上で図形を操作



タブレットPCに考えをまとめる

考えの共有化を図る



電子黒板を使った発表



グループでの教え合い

個別学習に取り組む



タブレットPC上の問題を選択



タブレットPC上で問題を解く

経営のイノベーション 経営型研究協力校における 学校経営コンサルティング事業

【平成 27 年度経営型研究全体テーマ】
学校組織の協働体制の構築を図る
学校マネジメントの在り方



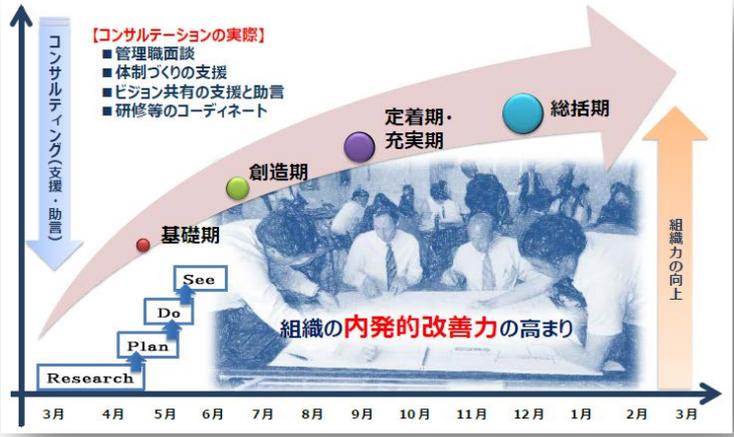
個業型から 協業型への転換！

協働体制の構築が具現化した学校の姿



校長のリーダーシップの下、ビジョンを共有しながら、教職員一人ひとりの能力・適性を活かした学校組織が運営されている。教職員全員が協力して、日々の教育活動において機動的に対応している

学校マネジメント成長モデルに沿って



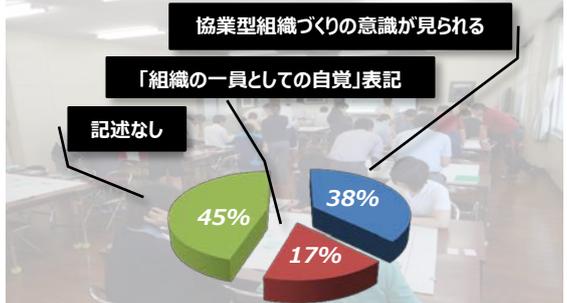
なぜ、協業型組織なのか

1 山積する学校現場の課題は組織で対応！

子どもを取り巻く環境の複雑化・困難化
学校に求められる役割の拡大
新たな教育課題への対応 …等
個々の教員の創意工夫や努力を超える

組織で対応…協働・協業型

2 協業型組織へのさらなる意識化を！ 学校教育目標等に見る意識 (H27年度 県下457校の学校経営案より)



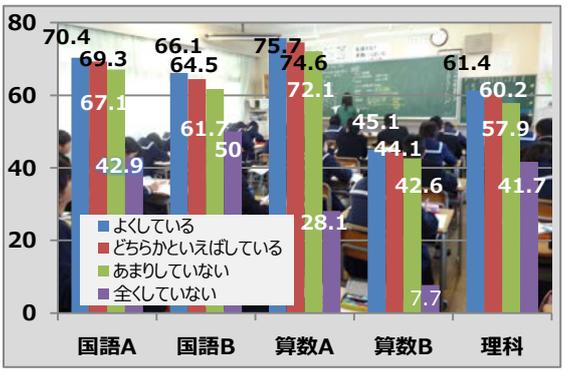
3 「モヤモヤの処理」が困難な若手教師の参画力の向上を！

Q：あなたの学校でできている条件は？ (H27.5.28義務制5年経験者124名)



4 組織的な取組が学力向上の基盤

Q：学校全体の学力傾向や課題について、全教職員の間で共有していますか
(文部科学省・国立教育政策研究所 平成27年度全国学力・学習状況調査 学校質問紙選択肢別平均正答率)



コンサルテーションの展開



協働体制の構築



協力校の実践へ →

■ 具体的な取組 ■

1 職員の主体性と積極性を活かしたボトムアップによる改革推進

- ワークショップの結果を活かした（校務、校内研修、授業）改善策づくり
- 校務改革、授業改革の進行管理シート作成提案
- 研究主任と連携した校内研修改善（ワークショップ、実効策シート等）

2 全職員が主体性と積極性を発揮する校内研修の工夫

- ワークショップ、実効策シート、簡略化した授業参観シートの導入と活用
- 授業づくり共通実践事項の作成提案
- 自主的な互見授業から年2回の互見授業週間企画提案

※ 職員の主体性と積極性を活かす協働体制づくり

- ビジョンの提示と共有（ワークショップ、校内研修、ミドルリーダー等）
- 学校組織の改編（学校改革委員会等設置）と日課表等の工夫改善
- 目標設定面談、学級経営案作成等での関わり強化

室小コンサルテーションのポイント

- 1 管理職面談による方向性の確認と資料提供
“協働体制づくりのためのプラン提示”ビジョンの共有、経営システムの整備、モチベーション管理等
- 2 学校改革委員会担当への支援
職員の声を反映した改善案作成のための支援、校内研修の活性化のための手法紹介等



校内研修の様子

“ワークショップによる意識の共有”

★ワークショップでの声★

先輩の授業を見て学びたい。
得意な授業を交換し合う。
児童同士の学び合いができる学級にしたい。
テーマやイメージがつかめずわかりづらい。
意見が活発に交流できるためのアイデアが欲しい。

教師の声

学校改革委員会と研究主任の協働

学校改革委員会と管理職による取組

取組1

★主体的な取組及び校内研修の工夫★

互いの声掛けから、授業参観が始まった。
研究授業後、他のクラスで改善授業を行った。
12月、2月に1週間の互見授業週間を設定した。
子どもたちと一緒に、他学級の授業及び帰りの会等を参観した。
研究会にワークショップ、実効策シート、授業評価シートを導入した。

取組2

★校務等の改革★

職員朝会・朝の会、帰りの会の持ち方、支援員の活用を提案した。
部活動の社会体育化が進み日数を週4日から週2日にした。
PTAと合同でノー宿題デーを設定し活用が進んだ。
分掌の活性化をねらった学校組織の改編を進めた。

組織のコゴが伸びた！

- 職員の学校ビジョンや課題、それぞれの思いの共有が進み、主体的な校内研修、授業改善等の意識が向上し、実践化につながった。
- 校内研修以外でも自主的な授業力や指導力向上の取組が始まり、チームでの動きが活発になった。



1 学びのUD化による生徒が主体的に学ぶ授業づくり

- 学びのUD化と合理的配慮による分かる授業
- 主体的、協働的な学びの日常化
- 生徒会（学級会）との協働による学習自治

2 校務改革による学校教育目標の具現化

- 学校会議システム(目的・流れを明らかにし共通理解を図る)の運用
- 本務に向き合う時間の確保
- ワークショップを取り入れた校内研修、授業研究会

3 玉中至心活動を軸にした学級や生徒会の活性化

- 玉中至心（挨拶する心、清掃する心、学ぶ心、律する心、感謝する心）
- 玉中至心を中心にした学級及び生徒会活動の展開
- 清掃活動や環境整備活動、体験活動、ボランティア活動の推進

玉名中コンサルテーションのポイント 研究の推進状況の見取りと助言

研究推進委員会・各部会から提案された共通実践の定着状況を、若手教師の授業実践を通して見取り、客観的評価をし、研究へのフィードバック



← 若手教師の授業を参観

○ 生徒の活動について		第3回	第2回
1 先生の説明を聞く、板書を見ている	約 8分	16%	-23.5%
2 先生と一緒に問題を解く	約 5分	9%	-9.8%
3 問題を一人で解く、ノートにまとめる	約 13分	26%	-29.4%
4 発表又は友だちの発表を聞く	約 4分	8%	-3.9%
5 ノートに記入するだけ	約 4分	8%	-9.8%
6 グループ、ペアで話し合う	約 12分	24%	-19.6%
7 その他（あいさつ、黙想等）	約 4分	8%	-3.9%
○ 教師の活動について（一部抜粋）			
1 先生が話している	約 17分	34%	-43.1%
2 生徒の活動を見守っている	約 32分	64%	+62.7%
3 その他	約 1分	2%	-3.9%

※赤字は重点項目

授業評価→
(一部抜粋)

取組1 “コアメンバーによる改革推進”

※コアメンバー…取組の核・中心になるメンバー

↓ 活発に意見が交わされる研究推進委員会

校内研修組織・7部会のリーダー

- 研究推進委員会での意見交流
- 公開授業と授業研究会の実施
- 先進校の視察



学校改革の大きな推進力に

- 各部会の活性化
- 授業改革の実践
- 生徒会の活性化
- UD化の促進
- 校務改革の実践

取組2 “生徒会との協

全員合唱や中高連携の環境ボランティア等を生徒主体で実施。さらに、ワークショップやランチミーティング等で新生徒会へ協働を呼びかけ、次の体制づくりが進む。



組織のコゴが伸びた！

- 研究推進委員会を核にリーダーが育ち、5年後、10年後の学校を見据えた学校改革が進み始めた。
- 校務改革により、職員が本務に向き合う時間を生み出し、生徒と協働する体制づくりができてきた。



■ 具体的な取組 ■

1 授業改革

- 授業の統一事項を各教科等の実態に応じて揃える取組
- 学習ルールの見直しとその徹底を図る取組

2 環境改革

- 生徒の学校生活での動線を考慮した校内環境整備
- 職員間の情報共有や連携を密に図るための部会制の導入

3 生徒会活動の充実

- 生徒自らが企画・実践できる場の確保と教員の支援体制の共通理解
- 生徒会活動を中心とした校内リーダーの育成

腹栄中の目指す学校経営での「T型マネジメント」

笑顔追求（腹栄中大好き）の学校づくりに向けて、生徒と教師が協働し校内で守るべき統一事項を定め、学校生活で“「揃える」+「続ける」”の取組を実施する。

腹栄中コンサルテーションのポイント

- 1 管理職面談による現状把握と課題の明確化
学校経営上の諸課題に対するアセスメントと課題解決に向けた方法の協働的な検討を行う
- 2 職員の理解と納得を促すワークショップ型研修の実施
学校経営目標に基づいた教職員主体の取組の計画・実践により学校経営参画意識を高める

取組1 “協働化支援組織としての部会制の導入”



教職員による課題分析とその改善策の検討
(ワークショップ)
● 腹栄中の再発見 (学校の強み・弱み)
● 授業に関すること
● 生徒に関すること



生徒による現状分析とその改善策の検討
(生徒会によるワークショップ)
● 授業に関すること
● こんな授業がいいな
● こんな授業はごめんだな
● 生徒自身に関すること

授業改革部

◆ 板書のUD化と学ポードの積極的な活用等

環境改革部

◆ 職員室掲示板を生かした情報の共有化

生徒会活動の充実部

◆ 委員会活動の活性化を目指した取組の検討

取組2 “「揃える」+「続ける」プロジェクト”

授業中の生徒指導を中心としながら、教師の基本動作（姿勢）を7項目に絞り、共通理解・共通実践する。

- 1 授業開始1分前には、教室内で待機します。
- 2 チャイムが鳴ったら授業を終わります。
- 3 私語があっている間は、待ちます。
- 4 話してOKの時間は確保します。
- 5 生徒がわかりやすいように板書のUD化をします。
- 6 授業の「めあて」カードを確実に使用します。
- 7 学ポードを活用し、班学習の機会を増やします。

組織のココが伸びた!

- 教職員間の生徒に関する情報や実践上の課題を共有する場が増え、共通理解・共通実践が図りやすくなった。
- 各部会のリーダーが定期的に集まり、提案事項の進捗状況を確認し合う場を設けたことで、課題解決に向けた対応が計画できるようになった。



■ 具体的な取組 ■

1 生徒が主役の授業づくり

- 個々の課題に応じた目標設定と自己評価シートを活用した随時評価
- 生徒参画による学習ガイドの作成

2 課題意識から実効策を共有できる校内研修の工夫

- 実効策の確認を出口にした校内研修の工夫
- 生徒の意見を評価に活かす授業研究会の実施

3 職員の自律性の向上

- 前例踏襲にとらわれず、職員の思いや強みを引き出す改善案の工夫
- 校内研修におけるファシリテーターとまとめ役の輪番制

河浦中コンサルテーションのポイント

- 1 直接かかわる(しかけ)・任せ(しこみ)経営行動の明確化
“人材育成”のポイントとなる裁量性の強化を図るため経営行動を明確化する
- 2 プロジェクト(PJ)化による業務の整理と分担化
職員の参画意識を高める



取組1 “子どもの声からPJ” 生徒の授業評価への参画

★授業はこうりたい★

意欲を引き出す授業
活発に活動できる授業
生徒が話せる授業
生徒同士がアドバイスを言い合えるようにしたい
目当てからゴールまで1本筋の通った授業

教師の声

生徒の声

★こんな授業がいいな★

話合いが多い授業 褒めてくれる授業
一人一人がわかるようになる授業 生徒中心の授業
★こんな授業はごめんだな★
決まった人だけで授業が進む
先生ばかりが話しまくる授業 黒板を写すだけの授業

思いをつないで
校内研修をフィールドにした
学び合いを具現化

取組2 “オナーアップPJ” 校内研修におけるファシリテーター・まとめ役の輪番制



初めての経験で緊張したが、事前の予習や話合いの場での意見の集約など、これまでと違う姿勢で臨むことで、何となく参加していた研修の大切さが分かった。

校内研修のまとめの様子

組織のココが伸びた!

- 校内研修がPLCの作戦基地として機能し始めた。
- 授業づくりに関する個々の課題が職員間、管理職間と共有され、授業改善に対する機運が学校全体で高まった。



* PLC:(プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ)の略)共通ビジョンの下、協働的に学ぶ集合体



1 学校魅力化プラン

- 生徒・職員意識調査、学校評議員会・甲佐町の意見から課題を明確化
- 学校魅力化「目標達成表」作成によるミッション・ビジョンの共有

2 職員の希望による作業チームと経営マネジメント推進委員会

- 職員の得意分野・自主性・アイデアを活かしたチーム編成による活動
- 経営マネジメント推進委員会による各種取組の進行管理

3 広報活動・地域連携の推進

- ホームページの刷新、ポスター作成と掲示、元気の出る講演会
- 地域特産「ニラ」スイーツの開発（生徒・地域・大学連携）

アイデアピースにより、レゴのようにわくわくするような新しい魅力の創造！

甲佐高校コンサルテーションのポイント

- 1 学校の魅力化**
学校の課題を踏まえた生徒・職員のアイデアを採用しながら実践へ結びつける
- 2 各種ワークショップと意識調査の活用**
生徒・職員の参画・協働意識を高める

職員ワークショップの様子



“ボトムアップ&トップダウン”のバランス



まとめ

本事業は“協働体制構築に向けた足場づくり”として有用であった

有用性の高かった

2つのコンサルテーション機能

1 教育的支援(相談者・調整役)機能

- (1)リーダーシップの下支え**
面談等を通じて経営行動の見直しや改善に導くことで、方針が明確になった。
- (2)管理職と職員、職員と生徒のコーディネート**
管理職の思いを職員集団に、また生徒の願いや本音を職員集団に伝えて双方の意識の摺合せができた。

〈協力校の声〉

訪問の際に自身の考えを聞いていただき、また返していただくことで、頭の中が整理された。

2 内発的改善を促す処方箋としての機能

- (1)課題意識の顕在化及び共有化**
ワークショップ型研修等により、問題意識や課題を出し合う場を設定することで共通認識が生まれた。
- (2)組織目標と個人目標の一体化**
育成面談等の活用を促すことで、経営方針と個人目標が一体化し、育成の視点が明確になった。
- (3)協業型組織づくりと参画意識の醸成**
実態や課題に応じた諸研修の企画と運営により、全職員で学校組織や組織の一員としてのあり方を考える契機となった。

本事業において、意見を抽出し、形になり、文字になり、手だてが考えられるようになった。

加えることばかりなので、いらぬものを削るという視点でアドバイスいただけると活用できると思う。

協働体制構築の促進ツール

- 自己評価シート
- ワークショップ型校内研修
- 共通実践事項の掲示
- 管理職による形成的評価

今後の志向

- 1 ビジョン共有から実効策策定、管理に至るプロセス等における支援のあり方**
課題の焦点化や実効策の練り上げ等に関する方法や内容の適切性、適時性に困難さ。校種や課題に応じた対応策を探っていくたい。
- 2 負担感を効力感に転換するコンサルテーションのあり方**
負担感ではなく、効力感として実感できるよう、事前の理解と納得、取組み中の成果の見え化等のアプローチ内容と方法を蓄積する。
- 3 協働化支援組織のシステム化**
内発的改善力を高めるための支援組織の人選、持ち方、時間の確保等についてさらなる実践の蓄積が必要である。



研究のまとめと次年度への提案

熊本県立教育センター共同研究 2015



研究のまとめと今後の課題

7月と12月の意識・実態調査の変容から成果をまとめた。

研究のまとめ

下記に示したグラフは、教科型研究協力校の小・中・高・特別支援学校の検証授業クラスの児童生徒を対象に、7月と12月に実施した意識・実態調査の結果を示したものである。本研究紀要パンフレットの調査研究において示した「21世紀に求められる資質・能力」(p3)に関して、10項目中6項目で全校種において意識の高まりが見られた。顕著な伸びが見られた4項目を下に示している。これらの成果は、授業者が「児童生徒にどのような資質・能力を育成したいのか」というねらいを明確に持って学習活動を設定した結果であるといえる。教科の内容とともにこれらの資質・能力の育成を目指した学習活動の工夫が有効であることが明らかとなった。

第2期くまもと「夢への架け橋」教育プラン

熊本県教育振興基本計画

目標：「子どもたちがこれからの激しく変化する社会の中で生き抜く力を身に付けることを目指します」(一部抜粋)
支える土台：「学校」は、「教える力」ばかりではなく「子どもの意欲や能力」を「引き出す力」が求められます。

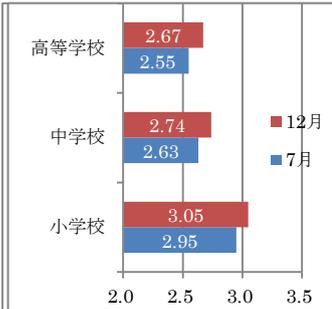
今後の課題

本センターは、研修と研究の2つの側面を併せ持つ機関として、教育行政が実施する教育研究を推進する役割を持っている。学校教育法に示された学力の三要素や第2期くまもと「夢への架け橋」教育プランで示された取組の方向、更には平成13年度から先駆的に取り組んできた熊本型授業の質的向上を目指して、本研究の成果及び課題を蓄積し、県内の学校や教育機関、教職員に対して、今後ますます幅広い情報提供を行っていく必要がある。



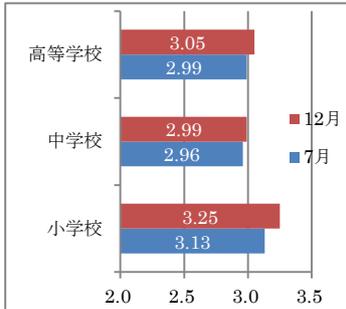
未来を創る【実践力】

自分の生活や社会(世の中)、環境の中からいろいろな問題を探し出している。



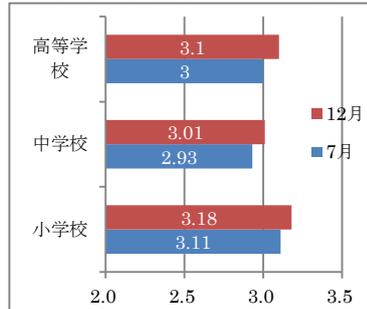
深く考える【思考力】

自分と違う考えを持った友だちと協力して問題を解決している。

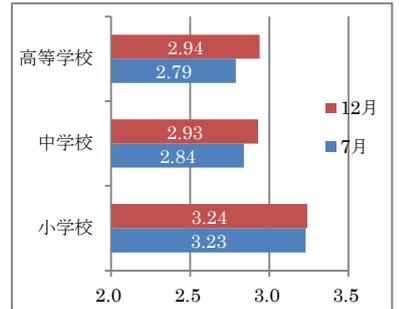


道具や身体を使う【基礎力】

自分の考えと他の人の考えを比べたり、結び付けたりして、よりよい答えや考えを創り出している。



目的に応じて、必要な情報(絵・形・音・デジタルなど)を集めたり、それらを使って表したりすることができる。

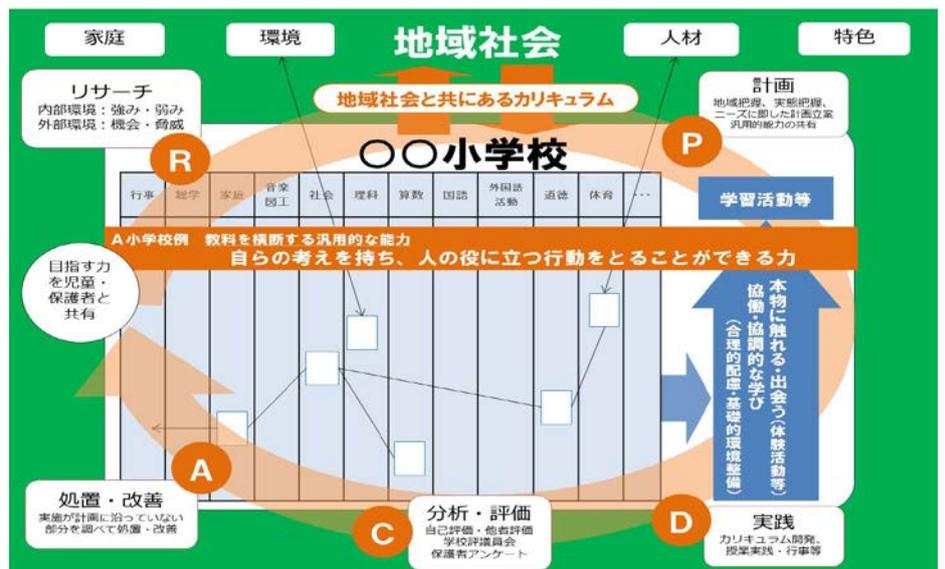


次年度への提案

次年度は、3年間の集大成として、実証研究の成果を蓄積するとともに、汎用的能力の観点から、教科横断的に、そして、小・中・高・特別支援学校の校種間で系統的に捉えながら、社会に開かれた教育課程を開発していく必要がある。いわゆる、カリキュラム・マネジメントの考え方により、次期学習指導要領改訂に向けて、21世紀に求められる資質・能力を育むカリキュラムを先導的に研究開発し、熊本県内の小・中・高・特別支援学校、特別支援学校へ向け、そのモデルを提示することができるよう開発的研究を図っていきたい。そのためにも、学校経営の視点から研究で用いたSWOT分析等を活かして、学校内外の環境をマネジメントしながら社会に開かれた教育課程を開発していく必要がある。

SWOT分析によるカリキュラム・マネジメントの視点

	内部環境	外部環境	クロスSWOT分析
(+)	強み	機会	内部の強みを外部の支援的要因で強化する組合せ 内部の弱みを外部の支援的要因で克服する組合せ
(-)	弱み	脅威	内部の強みで外部の阻害的要因を克服する組合せ 内部の弱みと外部の阻害的要因が結びつく困難な組合せ



【イメージ(案)右図参照】

今年度は、経営型研究協力校を5校、教科型研究協力校を4校委嘱するとともに、熊本県内全域から公募により研究協力員を募り、以下の24名の研究協力員の先生方に委嘱し、授業実践に取り組んでいただきました。

めざす授業像を共有し、「協働」しながらこれからの学びについて協議を重ね、実証研究に取り組んでいただきましたことに、この場を借りまして深く感謝申し上げます。

■ 平成27年度研究協力校

管内	経営型	管内	教科型
菊池	大津町立室小学校	山鹿	山鹿市立山鹿小学校
玉名	玉名市立玉名中学校	山鹿	山鹿市立山鹿中学校
玉名	長洲町立腹栄中学校	県立	県立鹿本高等学校
天草	天草市立河浦中学校	県立	県立荒尾支援学校
県立	県立甲佐高等学校		

※敬称略、順不同

■ 平成27年度研究協力員

各教科等領域	校種	管内	学校名	氏名	各教科等領域	校種	管内	学校名	氏名
国語科	小	球磨	山江村立山田小学校	西口 雄一郎	国語科	中	玉名	玉名市立玉名中学校	坂口 恵子
社会科	中	宇城	宇城市立松橋中学校	柴田 征宣	地歴・公民科	高	県立	県立南関高等学校	川崎 裕子
数学科	高	県立	県立南関高等学校	白石 宏一	理科	小	菊池	大津町立室小学校	倉田 康行
理科	中	菊池	合志市立合志中学校	一安 恵	外国語活動	小	山鹿	山鹿市立中富小学校	松尾 良也
外国語科[英語]	中	天草	上天草市立大矢野中学校	岡崎 卓	体育科	小	玉名	玉名市立玉名町小学校	西村 勝
保健体育科	中	球磨	湯前町立湯前中学校	久間 章弘	保健体育科	高	県立	県立高森高等学校	大城戸 靖雄
音楽科	小	上益城	益城町立飯野小学校	吉田 真紀	美術科	中	菊池	合志市立西合志南中学校	福田 勇
技術・家庭科 [技術分野]	中	八代	八代市立第六中学校	荻嶺 直孝	家庭科	高	県立	県立第二高等学校	田尻 美千子
道徳	小	天草	上天草市立維和小学校	坂本 義光	道徳	中	芦北	芦北町立田浦中学校	光永 朋樹
特別活動	中	天草	天草市立本渡中学校	伊形 英朗	総合的な学習の時間	小	玉名	南関町立南関第二小学校	山口 伸一
商業	高	県立	県立熊本商業高等学校	木庭 寛幸	商業	高	県立	県立鹿本商工高等学校	葉玉 英世
工業	高	県立	県立鹿本商工高等学校	福島 誠也	情報教育	小	阿蘇	産山村立産山小学校	島田 礼二

平成27年度熊本県立教育センター共同研究担当所員一覧

研究企画委員

土田 圭司 所長
古田 亮 副所長兼教科研修部長
宗村 士郎 審議員兼副所長
西澤 頼孝 審議員兼情報教育研修部長
後藤 良信 経営研修部長

研究企画係

本山 浩文 指導主事
恒松 龍治 指導主事
池田 幸彦 指導主事
黒木 幸博 指導主事
梶原 圭一 指導主事
松田 真也 指導主事

総務

佐土原 宏明 主幹兼総務課長
鮎川 由美 参事
平松 由圭 参事

担当所員

平岡 馨 室長	赤峯 達雄 主幹兼室長	村田 典子 指導主事	櫻井 祐二 指導主事
岡本 美保 指導主事	緒方 稔 指導主事	井上 善朗 指導主事	村上 豊優 室長
守永 雄一 指導主事	松尾 和子 指導主事	永井 一将 主幹兼室長	坂本 憲昭 主幹
中本 青志 指導主事	島 章人 指導主事	松原 弘治 班長	杉本 康浩 指導主事
築 義彦 指導主事	有田 啓二 指導主事	宮崎 亜紀 指導主事	中川 正利 指導主事
浅井 重光 指導主事	大塚 芳生 室長	山内 智之 指導主事	大山 充 指導主事
彌永 有香 指導主事	菊川 雅子 指導主事	堀川 和則 指導主事	古閑 博昭 指導主事
岩本 龍二 指導主事	岩崎 敬志 指導主事	工藤 真紀子 指導主事	溝口 博史 指導主事
濱 寛明 指導主事	岩崎 秀司 主幹兼室長	西山 俊企 室長	
市原 小百合 指導主事	四元 正明 主幹	武下 浩二 指導主事	

◆参考文献◆

佐古秀一・垣内守男・松岡聖士・久保田美和(2015) 学校組織マネジメントを支援するコンサルテーションの実践と成果(Ⅰ)鳴門教育大学研究紀要第30巻
小出禎子(2011) 組織開発を支援する学校経営コンサルテーションの実際と成果 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)第58巻1号
国立教育政策研究所(2014)：教育課程編成に関する基礎的研究報告書7、熊本県教育委員会(2014)：第2期くまもと「夢への架け橋」教育プラン
国立教育政策研究所(2015)：資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～



熊本県立教育センター
Kumamoto Prefectural Education Center